古今和歌集序考

全

特別
ヘ4
8206

顕昭註或なりと一心を苗とするハ次々鳥虫の聲もおなじくいバ人の心とてハ理を通らぬやと思へるが彼一つのなる虫ハたとく

古今和歌集序考

やまとうたハ人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける

哥ハ人のこゝろにおもふ事より出る言にてことを草木の地の中の種より出る葉のごとくなりやまとゝハ多の本耶麻止てふによりおこりて世の名となりぬるといふさて天皇の御代ゝあまねやまとゝいふ言葉なり又やまとうたハ其のつりし日本をさすなれバ上の名のごとくも

早稲田大学図書
市島春城
春城清玩
ヘ4ヒ
14
8206

のちまで
てハまる
らんがお
み上を
まづあげ
よみ進
ハくとこ
ろによ
きぬれあ
るくとよ
こけ数多
きもの

ありぬ。こゝハ其ノ目なのがなふミまでもつ（けそのうち別紙にあり）
考ることごとくハよみときつる中なれバやるぬと
歌ハとくいへるハ。既ニ奈良の卿より書く唐ニ
ならひそれつゝ高ざまなれど万葉の悦ら
此歌風調ニハ、から歌ニ對へてこそやゝ
おとおもいひてつゝあかきハ、後も奈良ニ降
てハ事ハ今の京と成てハ。世てやゝおと
ふことゝくめ思ひ出あらべし唐土ハ世ゝさ
何ゞみつ全ハ、前ツ世の詩を漢詩唐詩ともか也
いづれの世にして漢詩唐詩といへる事ハの
うされバ、國ノ一日嗣志ありの漢字朝ニく
やまとうたのといふ事ハ理りもあり且いふもむべ
きことぞ

おとハ人のおもふ事をうたひ出るいづれ。
そいましくハいでふうち讀をまきえて、もとう
ことりし中古き程にもことらも。其をことよめ大
とい上ハ上よりつることくよそ。且なやくよういつる
なるべし。万葉集てふ名もよろづのことの葉

或人此ことを
ことさま読
の字をあて
しるハ誤り
迄に読べし
我ことゝ正
さと訓ハ
俳優童
諺なと字
のたぐひ迷
浮くる
ましく為
以てハ別
こ文の人
事業に

乃ハ事る也バ之

世の中にある人ことわざしげきものなれバ。心におもふ事を見る物聞物につけていひ出せる

上ハことの葉のおこる本をいひ。こゝハそのおこるより所をことわりぬ。ことわざとハしてそハ只こゝと心得て有べし。何てといへど業（ワザ）ハ多しといへど限あれども限なき物をいふも料におけるいふことを捷くてらかハずれバ也

とひつるハ
一わたり
きこえた
れど猶
よくも
あらぬよ
しらる
ようこと
し

考ふるに。荘子庚小人之在世不能無為といへる無為の字ハ事業ハ次よて当てハ人の心あるてかしこくおもふ中の無をいひてさるとてこハ此無為也即ことわざとよみたるもそらごとく聞くて理りまぎらハし。次ハまた字羽の言とかく言ともあらぬのかゝりぬ事多し。此作者の人の心いかで

花に鳴鶯水にすむ蛙の声聞けバいきとしいけるもいづれか歌をよまざり

ける

世の中ニ生といきてあるもの春くして鳩八郎

り逢しうて之然達バ人かぞへゞ字を読うてふへ

きこえいふ具學鐘を挙て此おのものゝきこ

らとするハ文之

ちゝとも入ずして天地をうごかし目ミへく

ぬ鬼神をもあハれとおもハせ男おんなの中をも

和らげたけきもののふの心をもなぐさむるハ歌

此段ハおの功をいふて天地を動しとハいふ

お此序ニ動天地感鬼神でふみ依て一字

然るに去へおみよりてさることゝかどハいひ侍へねど

も古のおハ古言ゝ古ニ言にハ天地のめでし給ん

し記もあまい理屈をきゝて志りへちらを

も入れとハハすきゝ足ふと力らもて動せる

こむしてお八さることゝおもねどもいふ之鬼神を

もあそれとおもきもこれも理めハおゝとく

ずあそれといふ言もうてふてハ上のあれて動

と同し言ゑに申ならふくゑけるを喜あ述

神代紀ニ誅諸不順鬼神等といふが読日本紀かとある鬼神とはしハ竜文のうへのことよりて神代

ハ嗚呼と歎かるゝこともありて憂を忘るゝ道とハ
いふの道ハし
目に見えぬ鬼神とてけうとき言ハ多く
て禁にて言もよ世にハ多しりて周まて
神とハ妙に見えぬ道ぬ於いて見えぬ鬼神に
いと未ハあふく仏所と見へ見えまてハ神
とりハ天地の御霊成なる人の霊をいひ
又禽獣草木までも神といひあさき神によ
き神あしき神あるをこれあしき神と

記覚哉おさうとと八よあ八して

気の言と之哉のる人の事と理まるべるをいふとハことごとくいかゆふ

人の死さるなかゝ生ゑてハ死といへるも
又皆から言の本よりて出しハ紀かに
をとこをみなの中をもやはらげてふハ家の常
にて挙よさいとあしき道の中に古への事一つ
哉挙ハ旗男てるもの御時三輪川の道よそ
杉とあに御契ことなるて夜御まする道路に
を女ハ先ゝ何するまでやうをそてこれれまるを
中あやしかハて宮いふらえてあるを返こぬるて
大御代を延ひしこうてふいふままて老めいきち

ことハ不求理すをまれひくておもひ乞にとばなのるすなりはを得き云こ求理をなしてハつりにとまて詠のまことゝあらは古へのなとハ什まことのまことでもてる哉べしおハ

從て悦ひいかりかくてうらみハ死をもおそるゝを

ハ獣さへしらん

考るに今の京になりてハ男女うたよみてあそぶ

へきし驕りて人にと言とらんをするごとなる

よめバ気がいよ乞をやハらぐるよし有 古へハたゞひ

たよことゝをいひあらはし人をうごかしむるなる世

なれバ公もていつれも人の心なごめりき近ハ古

事記の御萬葉集なとをミるへし

世とよハれし雅み由緒ハかハらず[illegible]ハ御世常

たさあくよむことゝすもハたさなみひと心ある桜とよむへきなときと云ハ人をの名見よ了女とし
れ常哥妹の門とんなひけの山と云妻の死て山葬りる山へ従妻の居ることくれ

基あるとかしこき道ゟ古人の事を伐る基ハ雄

略天皇の御時三韓國の道まて和をもとめ法縛

建そこを以て婦の心をも和さん為の旅よりハ船

大やうもさうらなる近とかしこき仰ことゝをやをしつい

てよ心やすみなみにやをして宮ハ稀近てたけくおハ

そし小なさかりて心の和まりすくなかりし

古事記なとをもて知るべしされバおもひえるべし

考るに古へハ文武の名をもとめ天臣皆武きをむねた

もてとし 御代をも治め給ひき然るを近ころに事

もしてさ
つ祢約
ゐとい
あさぐひ
そけれ
さか心そ
まことの
よことゝ
とゝろへ
し
此和のこ
と奥之ハ
日本記ふ
よりぬく
こ申せハ
今の紀正
且て云古

ゐらきて武きものゝふと申しハ只手法のおもり
のまゝに勝くあらじなるもおもとおもしよや
こゝハ古へよりねまでといふ前なる道バかふぞや
此国て地のひらけ始し時よりいてきふなり
上ふハおふハ人の心より出るてふ理りをあげてふハ
こなの始まることをさがさて天地の開ことハ
伊邪奈伎伊邪奈美のみこ大御神たち給
て婦夫の道をさだめ給ふ時ふ男神先ん唱へ女
まくあぬよ申しうましとさるみあひぬと

古事記ふ
ハいさけの
たりふこと
めし伊邪
奈伎の命
より前て
六代の皇
神おハと
しゝと
まさ家の
物の初ま
よふす
此三皇大
神と成ひ
て乃のこ
とをるし
始めあと

女神後ふ唱へぬるくあなふ中しうましをと
とこふあひぬとこ道をこなみ此始めといふさ

（此ふみの事ハ弁古記 此事ハ別ニ有）

しかハて この上を 八雲あるて 天地開 始し時と 八雲ゝて あゝちて めて古き 注あれと ひつこと なふめハ おみあよ つて見え 八雲まで 別紀よあ しくあ げつひ

しかハあれども世に伝ることハひさかたのあめにしてハ下照比賣にはじまりあらかねの地にしてハすさのをの命よりぞおこりける

右に二大御神の相となへましゝ御言ハ[illegible]いまだうたの體としも[illegible]したてる姫とすさのを命ハ[illegible]世に伝ふる[illegible]の始めてとハいふべきを下照姫ハ地つ神なれど天にのぼりてまかりけれバあめにしてハといひすさのをの命ハ天つ神にませども下つ國へ下

めるものも 上下の 冠辞の コトハさ 考あし く出此 集よ略 きたいし [illegible]

りてよまれしうたなれバ地にしてハといへり（下照姫のえ木）まづてよあめつちといふハ（神代紀ノ一書ニ[illegible]）是下照姫のおやハ先て[illegible]を祖の命[illegible]稚彦に下つ國を和しうけるこゝとのりして下しまつるに天より稚彦下りて大名おほなむちのむすめ下照姫をめとりて[illegible]ることとまでかへりことや[illegible]さゞりけれバ天より名無雉を下しつかはしてうかゞはしめけるに稚彦その雉を射るに矢又かへりて天の稚彦の胸に当りてみまかりきそのもがりを送りて下照姫の[illegible]

て在りし此ひめの兄味すき高彦根の神ゟの喪をとぶらひに上りて来し時此命のうちをかめて下照姫のよめる歌に阿妹奈屡夜乙登多奈婆多廼汙奈餓勢屡多麻迺弥素麻屡迺阿奈陀磨波夜弥多爾輔柁和柁邏須阿泥素企多迦避顧禰てふを（是を哥ノ始メテ之しるなり）素戔嗚の命は此命あぢきることのゝ為すに依て一つ御おやの神ちいりまして下つ底の國へまかりとてせらい降しかへりまして出雲の國に降て稲田姫を御妻としまふ時に宮を作りのふ文作りまふとて夜句茂多菟伊都毛夜覇餓伎菟麻語味爾夜覇餓枳都倶屡贈廼夜覇餓岐廼とよみたまへる（是八雲立の哥てふなる）ちはやふる神代にいまの文字もさだまらずすなほにして事の心もひろくあらはし人のせとるありてすさのをのみことよりぞみそもじあまりひともじよみける

ミろちめ
ち八千つ
とあ小は
しくてお
とね数と
おのるや
陥つ辞之
まて一二三
より九迄

こハつとく
いハタチ
より加十
千まちふ
ハチといイ
あらつハ
国一言ふ
ろなも言使
までちとる
つとふ
のこ百二千
年せ紀ノ
おふも百
あ那り八
タチと主
薬師寺
み仏足石
のおよ
三十二お

これハ言ありて太古の神代ハ文字なきことなるを学て
なの世になりて三十一ッ字の歌のみ用ひし
本より歌の文字もこの二大御神の唱言
よりして下照姫の歌なるを始めとせる
ほかりして今ハ人の代となりてハ他人も聞かく
へし心をかりてすむきを質（スナホ）なる神代ニハ心も
ますにいひしハ事の心ともかくしといふ
考るに神代ハことよりそて人の代となりても
古事記日本紀の推古天皇の御代まで

のこゝさ
弥藐和
阿麻利
布多都
のかくち
とらきさ
アもこてふ
こともし
ときる
みなりて
なりし
ナくし
なる手人
昔きあや
のなり

の歌ハ心も詞も後と異なりて句なともさだめなく
さても多く万葉よりも三言四言五言六言七言
八言九言までの句ありて句次もいと異なる
ありけるに神代の歌にてハ中々に解りかたく
されに神武天皇の大御歌を始て其の末の
歌にこそ大古の人の心解りやすきハ多くきこえて
なれど神代の歌どもとなるハいとふかくやさしく
も上つ代の人心直くいひ且ねの世を伝ぬこと
ぞ多けれど年を経て古へを広く学びぬり

くさしへハ解かつへきをや又ハ歌の字とハ物
こまかなる上ニてハいひもしえてめごとく
いふまハ歌の詞にてちひとことをかざらずて手
べき也

人の代と成てハすさのをの命の三十一字
より歌をよみ給ひしよりそなたに人の世と
成てそのさまなかにかくれなく心ふ言あるを言哉
上下ふいてハ文のなみすぢく出しふふくりさき
利此稜有き物読やうる此集の歌の端め六

とべふもあり
考るにこれにハ短歌のたしめ等のいひて
長歌のなをいへるハ昔に万葉をみるに人万
呂も赤人も長歌にまて好みることハ
あまたなるを今京このかたに短歌のことのみにて
長歌ハ誰も好まぬ事なればいとめてや稀也
ども上下既婚の歌み事をいひしかバ長歌
のことをもいまて有べくもめ願ひも二十詞ど
もの哀しらすしびバさめのしみ言捨くさハ

めへ
かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれ
み露をかなしむ心ことば多くさま〲に成
りける
かくてぞとハ上をうけて下をまとひことぞ之
さてうたハ世の人の心に或ハめで或ハうらやミ
或ハあはれミ或ハかなしむにつけてよめる歌
の多く廣く種々に成ぬるをいふなるなり
に花鳥霞露とてあるをとらずすりしよめく然

是ハてに古歌を引ハせざりし　或人の歌を引
し是をよくあく思ひ行ハ此旨也
遠き所もいでたつあしもとよりはじまり
て年月をわたり高き山もふもとのちりひ
ぢよりなりて天雲棚引までおひの昇るごと
く小此歌も●かくのごとくなるべし
みしきことの大きになる迄をたとくに字の二ツ
ハ以てちりひぢハ塵と泥土と之神代紀に泥
土此云于毗尼沙土此云須毗尼といひ乃葉て

ひぢ也を泥ること記して云る下すむ後之記にひぢを通るハうまりつく言使ひとりひぢ居すハ干のミ泥さへし

わにも皆同し
考ふるにハかゝる国の文に千里始一歩高山
成微塵てふをとりたり皇朝の家の筆
さる文ハとらであまりしぬ志づもめづら
しげなきことゞもになん
なにはづの哥ハ王仁が御門すゝめし名之淺香
山のことばゝうねめのたはぶれよりいでて
此二歌ハうたの父母のやうにてぞ手ならふ人
のはじめにもしける
なにはづハ應神天皇御宇より大
さゝきのみことゝ宇治稚郎子の皇子の命のみ
たがひに御位を迭に相ゆづりまして三年まで過
給ける間に稚郎子命御いのち過まりつ
迚ハつひにおほさゝきの命で御位にさだまりまさと
しこを王仁こまりてすゝめ候花にたとへて難
波津に咲やこの花冬こもり今ハ春へと咲
やこの花とよみし王仁の事とぞ
考ふるにこれとそおほかたしめことにてハいさゝ

所なれバミつよそれ聖武代の始ことや有
つらぬまゝにて室此御ことゝもこゝろゆかぬやを
しこと直ハあらし奈良朝まてハて大内
此御門をいひ遠よりして大内又ハ
御舎園をすへてもいひつ後世ハ今の
京と成て後ハ轉して太御所を申せ
る事と知し物にて古文よむ人ハこゝろうべ
き詞之やうまてとハ様の字此意に於ハ様
世の常にあるならいにて此文に多くいひけん

葛城王
ハ天武紀
に見ゆる
葛城王
をいふなる
べし奈良
此朝の諸
兄公を
葛城王
といひし
ことの代
あへぬ事
ハ袖中抄
に委し
前の采女
是ハ陸奥
よりたて
まつれり

下官志りさてハ室朝の文といふ文
ともなくて古しの物にこそ
浅香山の歌ハむかし葛城王をみちのく此國
遣ハさるゝ時國の官人らこと〱おろそけに
ありし進ハ王いかりておもて宴を設しかと
もこゝろゆかざりし小前の采女にみやびたるありて
酒杯をとりて王の膝をおさへて柄子をそりて浅香
山かげさへ見ゆる山の井の此浅き心をわがおもはな
くとよミしハ御心和みて宴しあそびし

采女のたはふれこゝろをよみへし浅香山ハ陸奥の安積郡の山にて此小山此井の有りしと云山の井ハ飾にくみ置四方井かハ浅しよて其さをふして下ハ大

てふことの葉をなるの十六にてゆかれバ此二ツの哥ハ上六男の哥にて下ハ王の新御代をほぎなり（アツ）（ルハ百済王仁か哥ト云ハ読ニ達ものや）次ハ女の哥にて大君の御心をなぐさめたることの平らかなりしなれバ此二くさの此父母のごとくに世につたへ唱へ来世るにより今の京にいたるまで人の哥書初るふはじめにもせしといふなるべし且手ならふ人のはじめにてあるにて哥を学ぶにもおもたひをなれバ上手の此功に

を浅くおもひまいらせぬといふのことまの詞今ハ僅出て源氏物語わかむらさきの巻ふさめまだ且手ならひはなれぬとりつるハその言にことの中にも此ふかき

いふなる其深くとて峯しなれどもさるべき言もなくて峯しハふく出るごとし仍て此ふ様の人皆の六ツの哥をとく解きてにもふさはしなる

ほやあらむも書かせバことの心聞ゆべし

てにさか
ゆめよを
まるひ
ながらなる
をもかは
てよそ
わかれ
とそし
ろうて
てゝさな
てまり

考るに真字序には六體といひて歌の
事を広くあましといひ次に至如難波
津之歌獻天皇冨緒川之篇彼大子或事
関神異或興入幽玄値上古歌多存古質
之語未為耳目之翫とかけて言葉明らけ
し此序に古今の詞の次に六體をいひて今
の世此中云々とあるハ其の體也事間にたさ
まりてよめる言も詞もつらね終ハ古にふ
るくうへの體もふと出るくとも仍ておもふ

に此序の歌の事ハ此條の上にさき所も云
云と歌のこと広く如しをいひてそも〱歌
のさま六つへ言とて云広く有りしかど歌
ハ六つの有をいひさて雜体の歌ハと
つゞきそれに歌の切有る字を挙て今の世
此中云と歌のむあしく如しよとつゞ
くづきこゝろまへバ此序の文ハ凡によく云ゝ
ありつしもとおもふ
そも〱歌のさまむつかしらの歌むもらくぞ有

べき
よろづのみち広く大きになりぬれども
すべていふ時ハ古の雅につゞまりてふ言なるべ
しかもしハ甚（いとも）くといひおこなひ言ひて毛ハ助
辞くの歌にも云々とハいふなる事にいへる六の
雅よりてこそいさゝかにて古の筆跡
国に始り此六の名もありとく云し而
ゝされど六くさにわかち中ハもとよりて此
言ことわりに家朝の古言にかなひてもせめつび

此歌を古継の王仁かよミつと古言にいふハ王仁ハ百財在人あるな
なりに後の人此いへること古にもたらん古ハ他の人多手をか

その考ハ次々にいふ
その六くさ此一ツにハそへ名
此次に大きなるみことをさへすなるてふ言あれ
ど此名にのミ取よし書てハ沢のみなをいふ
例まゝ違ひて文詞を違へ是ハ得み此注ある事
ゆへなる違ハ捨つべきとハいへバ他しるを
いひてさゝにかなふ心をさへいへるをよしとす由
なにはづに咲やこの花冬ごもり今をはるべとさく
やこの花といへるなるべし

く本兆
れと絶
その名こそ
此歌をよ
ミしハ能
て物さえ
下に捨送
朱雀院
同館心の
おとそそ
ら言之そ
此難波
はのおハ
た陰の代
代なるの
すりふあ
られ常らん
の歌也と

にも難波津の歌ハとあり　即これにて其の心
ハ既にのりて上ハ難波津に咲さかる梅の花
きざしてまさに御新代の大御法らえをことほぎ
述り

考るに神武天皇紀に諷歌とあるを今の本
にそへ歌と訓るがたゞしき　世に訓なるバてハ
それに依る言あるべし　然るを万葉に諷歌
といふ名ハなくて譬喩歌とあげたる下にぞこて
のごとく喜ハ絶しといふて下ハお聞えるの意なるハ

の人々へ
をれとも
さやよる
つゞん

有これに依ハ古へより歌をてらふ名ハおほくてさる所
ある代ハずてたゞへおとそひしくりまゝバの
諷歌をもそへ歌と訓たるを歌とよむハ様
のまぎらんとお用ゐされど今京にてハ
そへ歌てふ名もしらんいさゝかの平言（コト）めき
くれど理りにおきてハ聞へざるにあらねバぞ
といふハ其の花を仍て古今六帖にも木はもれ
歌に此歌をかへりみし其小字本の花といふ六
やすら梅ハ源に梅は花盛へしといへるハ甚本

て先さく花をまだくおもひあまりて古人の
言にあらばこそ梅ハ風流なる此言の此ごとく
はじめてから言よりとりてあつらん雅俗
の文みな作にも有ものなれバ（けり字批おくべき／論あり）
和訓にハらちなく歌
二八つゞしと物をうつりごとくよめるを子
うでこと家ハいさゝかも詞の何やさしきにかたが
まさふよりてあとも数多るごとくハあしかめへき
二ツハことの様似て異にまぎらハしく人かしらバいふ

古注にも
毛詩の儀
に泥て論
此れハて
のをにあり
にしらて
みにふ
二八延喜
の歌りく
く遠から
ぬ御の
御代ヽ
後に拾遺
集につく
ことぞり
なるおく
すりにも

春くにこれも古への名にあらバ
咲花におもひつくらのあぢきなき態にいひつ
ゝきの入もちがひてもいづるべし
二八春の花にふかくおもひ着て待惜む心
をつくし其趣をもまよひながらて月に背け
ちるをともおほへぬめハあぢきなき事でを
いふ也さてかゝる事に言世界にハ三へされどいふ
づけける言をおもふに世の事あとを数るごとき
ことゝいはゞ寄もあらば

安由さる時ハいふうきハ其の歌をよみて夫の名に入よしもなれいて挙るハ其のもうせるまで其ハいらぬもてへりうりの絆そしてそれる一し

老るにりてへおもてふ名ハ空鶴の古へにハなし
うたの六體になつきて作り出たる言之也
らバ古語に以て依べからずそハひとへに序の
言にて以へハ此文の言にあらざるて此の
も何に出たるよしなきてへいのてふに挙べきなら
バさるべき言の万葉此集にも多くあるを何とて
いらぬを挙しハ心に足らさと集に入ぬを挙
しかとおもへハでこともそこれに入ぬる
是バ其の定めもあらぬとかくおぼつかなし

言立てつらしき言にハあらぬ也
言よハなずらへ言の
なずらへ並領（ナミスカヘ）てふ言之（ナハナミノ男カトラハお通ツクトシスクトイフハ古言之）これ
を略語して為すへとも以て万葉出きハ心あ
吾屋とに寄し松子いかしきと花にさかぬ
其名蘿結つらむ其十八郎云従ぜ鳴
いてて逆機を月相に奈羅信さりけむこと
其ことよらず
君にけさあしたの霜おきていなハ恋しき

ことに消やらうまくといへる如し
こは此銷けに「君おきされていなは恋しき
夜毎におもえ消えてやあらなむといふを
胡蝶になぞへておきと消ともいふ類也
は此ならなはしのぶるにあらじ万葉に山の上此
吉夫の和語楢の下にて和は和擬意に
てなぞらへと訓へし丹治真人が擬人万呂作（二）
石見国に臨死時の歌とてふも同じ此なぞら
へてふ字は大かたなぞらへ歌てふ言に近きと

考ふに此の万葉に和といふは和ての意を和
ふのみてふに寄の返と人の歌をなぐさむる歌の
返なりとしらふといふことさへ古人は知し今の京
となりても皆様の事ときけは此ないわたるに
はかなはじ

よつにはたとへの
たとへとは萬葉に譬喩歌とあるてくくてふ云
も有なれは立歌てふ言ありておもて一つ云てこれは
ることぞや歌へよしするに然れば上にいふ如く

こそ為
へのてを
のてめ下
なれはるく
ことゝふ

此歌ハ万葉巻四八百日行浜の真砂も我恋にあにまさらしかおきつしま守てふまへりとしぬへ

その字と同しきも文詞をいさゝかあらりし
いひたると万葉にハ有之

我恋ハよむともつきし荒磯海の浜の真砂ハ
よみつくすともといへる哥也

これハ人恋るにおもひの数ハかきりなき我にた
とへてハ浜の真砂の数も及ばじといふ事なり然
れバこの譬をハくらぶる事としたる
万葉の譬喩の意とハ少し違て文詩に
てハこれハ興の一所之興ハ物によりておもひお
云ハ事有といへど物より此譬へたる歌とハ
ことくなる恋ハ何恋につくともなくていぶかし
ありて海ハあらいそ海之

考るに万葉にたとへ歌てふハ上宗にいへるごとく
そへ歌に云としきが中になどにハ海山艸木など
どあるをいひて末にこそ心をいれさてあるべし
くるもあり此恋ハそのごとく始めより我恋ハ
なといふハ万葉の譬喩にハなし是も詞もて
きてける歌恋ハ書違に事多き歌なるへし

はきで平
人をさて人
おと三家
見し

いつゝにハたゞこと哥の

こハ物にもよせずたゞ言もかざらず常にいふことばのごと

くいふを専らとせり万葉などにおほくの哥に

さるいふ名ハあらねどこハ理りにつけて一つのさ

まとすべきもの也

いつはりのなき世なりせバいかばかり人のことの

はうれしからましといへる哥也

世のいつはり多けれバおもふといひておもひつゝ

なきにいつはりて子の手のなき世ありしておもふ

といふを聞ハいかばかりうれしからむとなむいふ

べくいはでも言をかざりよそへてつる事なき

歌ハたゞごとゝいふ也

むつにハいはひ哥の

皇祠にてハいはひといふハ忌といふ事なり

そといへる皇神といふにハ清まハりて

禍を忌ミ穢をいふにハ天地の長く久しき

を挙て経くかゝらむことを祝といふ

こハ鶴亀の久しきよはひをいひて哥詞

字のたりなきことをいはゞこか斎（イツキ）の宮斎籬（イカキ）御子斎籬（イカキ）などといひてあしきをいひて吉を用る數ハ皆是より出てハ祝賀壽祥なるがの字を作り音を分ちておとのきしたに字銅にハ只いふもてふゑハ一方なるを上下の京よりて分つなりさるをはせハらのかゝ文字に同なる違字銅の音を忘れていふら歟と齢をかぞふハ別ことおもひ誤れる人有そのくちをしう　次にいふすてこてにハ論べきこ

さいくさは
アしおへ
サイハリニ
アシトて
れしいく
古きこと
ふを聞え
称ハなと
もえり
うさき
字の筆
古事記日
本紀合万
葉延喜
式和名

と多し違ハ別なし此殿ハうべもとミけりさきくさのみつは四ッ葉に殿作りせりとあるなるべしこハ栄ゆる殿ぞと聞えしを今なるにまことに富栄えに事多く立そへたる殿閣の甍檐なとつらくいふにさけくさて此殿ごとくいへりうべハ事を足ることと諾（ウベ）なるも本さきくさハ福艸にてよろしき祥有草なれバこれハ莖ひとつもとにて末三ッにわかれ多葉となる

物なニミて有をたやく法お個四左おと保りて枝のまよこゝくおもつりて八ツ文殿八枝モ于蓮ろと神代紀ニ方也もてたーえろ小おもつ祖え敍通八延喜の

お菊るといへりさて顕宗天皇の御時ニ三の茎ある草御庭ニ生たりしを採てたてまつりし人ニ三枝部の氏を給ひしこともあり今ニ率川の神社祭ニ三枝花（サキクサノハナ）をもて酒樽をかざるといふ萬葉ニさきくさの中と詠しもその物ハ左右と中とあらハれたるニ依てなれしさきくさハといふ字を附辞ニおきて次の四ツ（ヅ）ともまてハりくさくさ例だ四ツたて三ツ（ミツ）ばの四ツばのふてつ母ハ

後まし ありを 朝ぶなむ ら人も るへそえ いしつ ゆりよ 人のこゝ多 くぬる つとけり 古集の哥 伝ふひつ 云ふ見も なやくよ まとめ思 る人ゑく まりし

屋のつま軒のつまといふへ大とまを造るにハせちゝさをせまきなりしをきよしかや峯るおもむきに

老ふいちひ殿ふを二ツの様として峯しつ いふるやこれを二ツの様とせハ悲らあふあてのおとも峯へきふあらびやまかりしてしそこる部こゝの中ニおのし此らび入合るゆゑへおさとくうてる所ニあることを屋もやゑとも岡しきく殿ニそへおもとて峯し

由へ成事
者ある一
右といへる
もし言と
又一ノ言
よ逸を
そかもて
下ふかたち
有ふみて
小祝分と
とニッ峯
るとも
ていそひ
と賀へ訓
こと云人
あり侯
こあり
しきひ

難波津の字もいましめあるをいふに言は
乃望即下のかなの部にて以上の峯にすき
春日の山にこしハ太のうたに入アー余の
居也山の岩根をこしハ太のうたにとる
一万代をまへにて君をこしハ太の為す
らへ字こえらつらの涼也真砂をこしハ太の
為と云字こうてつともりくもあから
つてとハかみえて言字こうて達ハいもひ字を
一の歌とをもしある　大也六ツを古語にを

か公比て
家宗紀の（ハやホイ）
宝壽ノ
作詞にあ
宝のこゝ
をもまれ
齢ともい
ひてのひ
出雲の
造神賀
の詞も
てうよれ
代を万代
といひ
此命とも
ふするる
ことバ多

とへば詩の六義に派して難波ハいとくあよ
して多くハさしも違收とて違が未して凡六字
みだりに述む事ハくさくあんかりつきといふハ
さる事にて此序のかの意ハからに文によりて
うの六義の意朋の意にとりあさるそと
そ敢にさる難も出来る也その上にしても
難ハ賦比興の三とよろつの詩也歌とこそ
すぢにてもいふに六ツにひきる事あ
らもや古事記日本紀万葉集などにくらん

く古事記日本紀なとも皆ふとふ八代の集をもいふまして序中こ詩乗につけて君をも臣人をもいひと半しハいふ何しるこいふなる別り侍

人こゝろ知へきくさの因うし陳序文にいはく

さゝしくおほき筆つくもあし且そのなか

とるにつけそやおはすりもあ道ハなハ後

の人此加へ後そやといひ述しかもさるを

之剖もほまもいよく疑ハしきこと

得道ることもいとおゝきハ覚えぬめしらく

まてハあかしやうれバその家のことなれハ

此むつの名も後の好事者くハへたるなる

へくおもハるゝ

今の世の中色につき人の心花になりけ

よりあたなるうたはかなきことのみいて来

れば色このみの家にうもれ木の人しれぬ

ことゝなりてまめなる所には花すゝき穂に

出すへきこともあらずなりにたり

今の世の中とハ今の京となりても延喜和

の比より今延喜まてをいふ也下に古

の事をも歌の意をもしれる人よう〳〵一

人二人とてまてもこのみの六人とある

くらへて見るさへ古今の学ハことなるも実より出て厚くめでたかりしを今ハ人の心色のみ好みてあさはかにうつりゆくれる事とも道ハ中々ある人世々に出しかたくなりぬといへり

老子に生としいはれしも常にそのめでたきをおほよふ学ハ古へこそことに多く論述すれとも古ハ人皆志す事そ乞さふらふをなさ今ハ多くのましき学も偽なる人もありて

そもそもさりきさてが中にも花なる関東の学此比より出ふかくの風を用かへさせるが術ハ世例へしかうつりて今の学となりてハ人皆うへをさりてうるきことなくなりぬこさうへ山城ハ如画にて男も女のかたふうつくむかしの武きをたかくあしかハいとゆかしきすめらきみはいきほひもなおとろへすして政も臣より出其ハつゝ下の人上一人を宗まれぬ世ゆ風つたひゆきてまはりておのづ

は世のか
こ歌を

こゝろひくりこのしきまへにあそびしるお
をば過にしくぬめ今にてみ文にいふとく
てハ古人男女おのおの事にあさきごとく聞へ
て宮桐の古人の大道にてむかしにハ唯今
文字よりてまじものおや
そめ初めをおもきハかるべくあるぬか（上ラウテテイフ）江
すくの代にみせにかと春の花みあしき秋の
月み夜こそまさむふべこそ見てことさ
つけて歌を奉ふをまふ式ハ花をこふもて使

そふとあ
る八誤

古人の歌
ハ松さふ
きなをよ
むともう
とせり十
てさ人を
の歌を奉
ていふぬく
歌さる人
こ松も
あふやと

あさき所さまに式ハ月をともふとて考へあさき
やうくとるぞくをとこみえてきうしおくることを
ろしめし給
花をこふてハ色の暁ふ月ふさみ山をお深
月をおもふて八月のあふらん夜ハふこそお
ふめよしあさき所さまにしあやあさき女にふ
たとへばふるさとにハ思ひてあるを初しめにへ
きみこなりしうきくをまつしめにこともいふ
へまさきそハ松の詞のうちさこめて恩ある

おもひか
ひゐゝ山
をもふひ
けとは
ゆきやる
をもあせ
よくらひ
こよひの
やさしな
夜つきこ
そはふの
日もえや
くるゝる
んぞと言
もおもひ
ふせ給ひ
問ふとよ

とやいはんさる迄で絵そめうちにきこ書ハ是っ

し

老ニ古今の序を対につけて待に恋そらさお

よみせ給ふ事ハ多けれどおもて人のさ

りし恩のありき是りまきにて其事ハ闕

つ此古人の身ニ物の哀をおもふもとよ

りさハ方のしき事そ是うく庵にまても

詩と別き有そごくおハよくよめど大

路をちるりさこりおハぬ人ことそ多りきこハ

むかし古へ
人のおもひ
まて是即
をさるき
の名みえ
かるくひ
とあつて
てあれ
まもかれ
くもなを
ゆくこく
ハてここ
そあと
みちハなし
の候まし
きゝ給ひ
むかひて

白親の古人をハおもひそ他の玉此庵と

万代ゝ詩もて及第をとうつしまさ

るなり

志あるのミにあらんさて迄石ぶみくつくそ

心につけて実を詠りひよみこひ能ニすまさ

多のしき心もあまりなしの細さこまそて人を

こひ松虫の音ニ友をしのひ高砂住の江の松

もあひおいのやうにおもほえ男山のむかしを

おもひ出てわか身へしの一寸をとく稽古

花をこひ月のてるまきれ又かくて月をみえやといえもちあれさかなさちり此文たとへ八古のお此意をいうくいけて申けんうおも古へハさ

をうひてこそよくさめけり
大かさりしてるゝあうを天の志ろしめしの
ことにあいべまんほの人天が御命を禄
ぐひ天ヵ御蔭をこい人をこ息い我伊とう
迄へ老をなげくも影をよみておもいを
みり心をなくさめしとて其も家の功此
中の一ッといつ一物めに了他をとうごーこと
てに敷いハもろくいいてハ我よりて我
心をさるぐさ女よをいよへさもこてようハ此

こそあけめ思ふ邪て子八直を行てものことハヨリまれあしくまれおよこうをされちいるを常といるへとうくあをさかくにまくこの此古へを意也て

集の家とももて詞としていひはずけゝる
さゞれ石にたとへしことハ賀に我天ハ千代によ
しませること雑につくたのこゝろもとこと
にうちてよることをもていひ禄ういよハ
上ハ千代まで収りい下ハ天ヵ御蔭を禄ふ
と国家そて一ッにいいつよろこひ私すきハ
雑にうまつきを何に法まんこと我うへ
小家そおくあることを高とへふーのけ子り
小よそへて八意にふーの禄此なよめおもい

さゝくハちえ言て松むしの音にハ難に君
しのふ草に契りて高砂住の江の松も
あひ老の様におぼえハ難くも逢たりも志
る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくさ
みして世をや法くさむ高砂の尾上に立
てる松ならなく我見ても久しくなりぬ
住の江のきしの姫松いく世経ぬらん住の江
のきしの姫君人ならハ幾世経しと言ハま
し物をと逢ふてもてなり男山の昔を
おもひ出てハ難に今こそあれ我もむかし
ハ男山さかゆく時も有こし物をおもくらへ
しの一時をくねるにハ秋の野になまめきた
てる女郎花あなかしかまし花も一時ぞ
とくねるにも言ふ古き物にそへくれハ源氏
ある徳に公家に繁くしけれハとこしへ今
の世までも家の道はなれは物思ふなく
おもふやいなや同じこころなき松のあい
あひたらハ高砂の二葉も松をまつ我や

あいをいともに老する意住の江に二そも松
と我とあひもさに老たるてふ意よそ
よくよめへハそれをもて年かさそめかさなり
おく我老たるハ男さかりのむかし
をおもひ出てようく盛なりつるも只今の
我ふりておいたる事を思ひしく悔みけ
りて時も我なよくこゝそめなけきぬる
ごもおゝとゝいへりて此文ハいとくいのはつ
けしかく然ふに浮世の人此頃に上の鶴

言ともにハ語を我おもひを引てなどしにいふ世
あひおいをおきとおもひ謂りし又ハ引べ
きこゆるもおくふるきまてふさ陰しつらす
こら我いりお生の今らしてハみもつら
ほ何のことありともなくおはれ老くする所ハ
よそ我しきゆるともひとゝこともともしも明
らりて文もいとおもしろきこと是ハ後田
東麿の考へ出をしことふて世をめて
ぞしこみ

又春のあしたに花の散を見秋の夕くれに木の葉のおつるをきゝてあるハとしことに鏡のかけにみゆる雪と波とをなけき草の露の水のあわを見て我身をおどろき或ハきのふハさかえおこりて時をうしなひ世にわびしたしかりしもうとくなりあるハ松山の波をかけ野中の水をくみ秋はきの下葉をなかめあかつきのしきの羽かきをかそへあるハくれ竹のうきふしを人にいひよしの川を引て世の中を恨きつるに今ハふしの山もけむりたえになりなからのはしもつくるなりときく人ハ歌にのみそ心をなくさめける

上の段にハ人々の業するをはしめみて老をなけくにもえりくつきをとよみて心をやりしことをいひ此段にハ今ハ世久しく成てさいひよそし山川のうへすゝのたくひ事多くていふくの事ハあきらかのくわまるをこなくて心をなくさむるといふへきて右の

こともハ此集のなおもていりてが中にらあふひゝこのあそこもにあらぶめゝとく聞するとも年ハこゝを清ゞめて来し旅の花の数を見ハおりおく数そめてくるにこゝ秋の夕ぐ連にハ秋ハ春めゝとこちハ宿にふりしきぬゝ道にふこゑけてとふ人ハおしこゝしおもとこ年ことに境のげにハりこ山いざ立よりてこて由りむとしくぬる然ハ花やきめるとつとし此をしくも有るかまんりてこゝろげさくに春るぬとおもへバなにはの浦に立浪のなごくの志わにやおもひ出るゝ事に雲路水のあとをとらて八雲路をおどくあぐるゝとれとおもひりんこゝ水のあるにきくてうきぬといひおこつ雁こゝきぬにハさかえおこりて時をうしおいハらくつ雁ハにそふ人あゝハほとの浦にこゝまつ山の波をけハ戻をおきてあらし心を我もくハこゝ野中の水をくこハ古への野中のしみづぬるゝ家也とこゝ秋之実に

山の嶺ハみねとよむたかき所をいふ

下葉とかくハ秋ふかみて下葉おちつく今よりやゝあかつきのこゝみえて此かきたるの心ハあかつきはきく此ころみえる也きゝたゝきゝく達中此うき帰し達ハ世にふ達たうき物しきけきく達けの心よしめて川をひきそてハおほの達てハ此も湖の山此ころ今ハふし此山も嶺もうてになりハ忽みふし此山も嶺もうてになりハ忽みふし此根のおゝめおもひふ心えハうえ神ゝみけたあて嶺

しの鳴ハといひしも是あくさきけより鳴音ときころかへし

さといふきもて此席の上にふし此ちゝ小よそへて人をこひしひゝくみ對へてこてに今ハけむりのこゝに成ゝといて是ハ今の叡此えし紀延暦十三年に此山大きに焼そめは炭欲の此にもやけしかハ終ニ山の頂ニ水とゝくハ火をおさへいきかひのなく成し所に延喜の此にハ嶺のうえ達ハいかにふらの橋もつくると聞人ハ難に。世の中にふりぬる物ハ津の国のなからの橋と我となりけり

てふを本にて伊勢の御のうたになにはなる
ながらの橋もつくるなり今はわか身をなにゝ
たとへむてふにて来り。なにはのながらをわかく
さめするとはふりぬしことの今たとへつるをも
古歌をとゞめて心をなぐさむと云上の男
山はむかしきこえしところ此今はふしの山
も烟たゝずといふを聞て申しはいとおも
しろし

老る小式説の無きの烟はえにて子古

ふくいひながら此橋もつくるなりといふ
言ぞといへるは絶りて文字ある物をと言也
さりながら何ぞといふぞ聞しは文は上京
婦しは多かりゐまゝて人をこひといひ
てうたに今はこえにといひてふもおよみのこ
ぞ心をなぐさめけるといへるはふしは
すゞりはたえぬるといふをきゝて橋も上
み今はやいふことをおもふのことといふても
てくちてつきたてゝといふ事数ひかし

且く半し坂に此山に個立とまをし物
かくて今の記に個の方送分の貞観
此によりて緒りし事知べし あるの橋
の定し平ハ文徳実録に仁寿三年十月
摂津の国中ス長柄三国の二ッ此河年
比橋けたえて人馬通せず堀江河に
なぞらへて二の舟をもてわたさむと仍て
十まに申るしのせにゆるえられたれば
小なりの之事ハなくて樗送米に毛

或日本後紀弘仁三年に此橋作り改められしことも見えたり大橋之て永わうこと也八文後の時より象也へ字

唐の清屏風にも長柄の橋柱をつくりて継送
ろうとある事をとて（法忠）あーるよりこの長
柄のなし柱むかしのあともなきへきりと
よめるは延ハ延喜の頃にハ此橋既につきなり
しを定之今の京とおてハ摂津の職とも
さだめられてあるゆへ此豊前の宮とも荒さ
れしかバ此橋も用なきがに行るぶまうに
して終につきてし地を或説ハ此代の
半ともさためくへのほさむこう送六はせいと

弘仁のこと八年ふし

万葉を老ふ人九八四十余りて今十ふハ及ひてまた過る人々よりて万葉ふ字多きと老きかしとほとえ

論あることなれバ左ふいへる考へさ説ともをよく考へらるべし

いにしへよりかく傳ハるうちにも柿本人麻呂なむ歌のひしりなりける又山部の赤人といふ人有けり歌ふあやしくたへ成けり是よりハ以前今りのおよそ人のことゝいへり人麻呂ハ此国奈良の宮御代の臣の頃にや其道之人藤原此文武天子の大宝此頃まで有し人なる事ハ万葉ふも

かふし姓世いと老こる形のけれハいことゝ赤人ハ人唐よ姓聖武て皇の御氏えよてゝま八年まての御世けり後かとふる死つらんこと万葉ふ見え多し

赤人ハ人麻呂より後なる人なれバみこやのて其の後此万葉集にのせしてとハ本ハ皇朝まで八てゝ日嗣知ましゝて皇子中事なるさうらハ唐国ふとみ子姉なる人なとも いひしふよりて歌をよむくらあるといふあやしく妙成とハいひもころしだにのやきまで作進てといふて金刀呂ふ多くふとくするやうに考ふ今の世みくはつる中ふもといふ次五奈良の法附ありいろまりみ寄るらの御

古今序
小大臣宣
子詩賦
を作りぬ
ゆきより
おなじく
へうりと
年一公
呂之言
後作お
盛ての
事
万葉集

世々の心をきこしめしたまむかの時にお
ほきくのうたはまのこともハ好に
年をへる物くや名同じ東風うしハいふなど
り下に此おもい多し皆同じ事の老にていと
よく寄進る年号進ハさゝつてもくおハ
万葉集作るにあらん為家の文也抱こそ上
ひともふさうゞ為奉之奈良此文みいろて
八隅に下りゐて稱徳を皇のたくまづどにハ
いと浅きに有りけるに人万呂と奈良の

ゝ年代
万葉集
ふら
して出
しかり
さいる
言ことと
小大臣宣
子ハお
三位已上
の人此に
史も甲
ことハ喜
故柿ず
人万呂ハ
史ふら元
にいまさ
又位あも

文まで有しとかもつるやいとおかしくぞある
本之人万呂ハはじめ浄見原の皇の皇太子に
舎人にてつかふる帝皇子の皇太子の時も
又舎人とこそきこえまつる文武天皇の御時不負め
國の掾（サクワン）目の守に任にてくだりしがお任せしら
とかしこそて死ぬる年萬葉のハる事るさ正
三位（ミツノクラヰ）と云ハ柿の本ぞや其ならんハ清ら由
きみを身をあハせ文いふぞあり成なるといふに
是ハ君も人も身をあハせたるといふ成べし

いうらめ人丸ハ古今万葉お記に志引して或人ハ麻呂ハ続日本紀ニ出といふもひらことそ付紀に人万呂てふ名ハ人続りあれと官位の姓氏にて

秋の由ふへ立川になかるゝもみぢばしど
の御目に錦と見えのい春此あした吉野山
の桜をば人万呂が心には雲かとのみなんおぼえ
ゝるやふこと々も後に立ならへまでな
にふこらなふらの文にいそりておのに君は
今秋とし人き君おもてにおもして人麻呂の
在し時も太のことゝくるえりさそて立田川も
こちらゝ流てなかるめりといふ歌の心も今
のなみなくりなのことわりのたゝなとそいふも陽の流

柿本祖臣にあらぬをとふきこざりけり人のいふ名言をうらやまてもこうをくれほと古今をめひむとふ小さとしくてらく言をうつしてみ文字すらいうらやこの古筆古言あく

ことにてしでよく人志らぬなおなし又人万呂の吉
野の桜を雲とくらしおもなほことなり凡
人丸ハ万葉集にのミ出たるをしらぬ人のおほく
りにいひつたへたるへし付言とはむかしをも文もよう
流きことの深もなく又なく桜にちらしなし紀
言ハ世貫之の筆なりの事も是非へらし
人万呂ハ赤人が上に立むことかたく赤人ハ人麻
呂が下に立むことかたくなむ有ける
世説新語にいはく文に陳元方季方といふ

まてあるを
や人丸赤
人のうたを
ふたりにハ
以万葉を
よる一後
世の集ハ
人丸とて
入なけ集
の後に或
のいハく人
万呂なお
といふハ常
人万呂の
おくあり
は万葉を
かくらん
時人万呂ハ

此才の人有けれハ二人の子ともおのく其父
の才のおとりまさりをあらそひて其祖ハ太
臣の前に出て何のまさりけると問し時大臣ハ
たゝ元方ハ兄となしかたく季方ハ弟となし
かたしとこたへしこれをもつてましものゝ
例とうるはしくなし

考るに人丸ハ長谷のむかしよりも家おいそれハ三
りける説のことく祖ハ海潮のことく小倒不経
家の調ハつゝきて其談彦まゝらを引鳴さもり

大才アル
丈夫なる
をと知へし
さてこそ
千載をも
きはめん
為すゝ之
丸よりい
きやさき
世をもこ
とに絡世
し人家れ
と学あ
ら人れハ
人丸と同
し飛鳥
夜家の以
かも人万呂
小おとゝぬ

こともさらく悲しき心をなめ到りて
聞人すもあるまそれおほゝ赤人ハ経家と
しそらるゝことハあらゝぐらゝみ心にきこゝとふしの
筆みちまりおくしてるよ似ぬ古今ハ詞清ら
ふして絶て清らくし水を瀧川の下ゆく水
有つとうらしてかのすゝて人万呂と大きにこと
之精進とも此人ハ大伴家持同池主の銘岑家
文ふあいのく多代師とする変のことく学られハ
既み太平良の京み中比よりしもふさめりへうも

おゝかれ
と名の作
ハ柿本
きて日し
にて高遠
へつきて
山部赤人
山上憶良
大伴旅人
笠金村ら
橋虫丸大
伴家持
それかしハ
おもれと
いとよく
よみ人
かたへき

世み侍てきしあらし
此人をおきて又すぐれたる人もなく有のの世に
に聞えし歌のよろしきものあらにてありける
人麿呂赤人のふたりも猶遠し人丸が哥多くしられ
たちいひて代々につたへたるよしいふより奈
良の都の末より今の京にて弘仁などの年に
またとおもひていふなるし　ことに此家持
名有人ハ聞えねと此集中のよき人たちに
てよらのふハ必ずその作れ人とさしたる多くし

此集中の
名の古く
ふハてま
そのあ
今といふ一
八次此定
のはより
延喜ま
てのあな
されこと
ちの二條
の言中
も知ぬ
序ふハ
万葉ハ
平城で

てことふよのさかみ此多にさく
老人ふ改すで有ける予ふ下ふうれよりさきの
あを集めてる哥二万葉集となづけ
るてふ人有者も猶まさ字序の誤りふるべ
ひて知しもみえ今万葉二十巻有銭ひて
いふもて天平宝字三年正月の哥まてしふ
終イめての文ふいるうてよくまてち一万
葉のよき人此事とせハ右の宝字三年
よりたの文ふ挙ふてもなとまその間称徳

皇太国の
じき人丸
赤人とあり
て撰らく
いるハ公
ーき深
りあく事
次のゝ下

光仁桓武平城嵯峨淳和の六代にハ惣〆歌
よみ手と多くとすりさそハ在のこて外古への事
ともがらハ僧正遍昭より大友黒主まてのこ
とやこ云されハ此間怠たられて文につゝ
よりて跡にいふるく此集に入るよみ人を
られて其名多くハ右の上六代此間の歌
あれハ是迄とこあて世にしえハと至る
物へ勅撰ハこれより万葉集とり古
ふ云此序の文にあらぬ事ゆへ也

こゝに古の事をも歌の心をも知る人わづ
かにひとりふたりありきさあれどこれかれ
えたる所えぬところたがひになむある
是よりハてもより仁和の比までに勅撰する歌
よしをあげてことわるべし其事とハ
古き世ゝにも万つの事歌の心とハ歌をよむ
ところえたるとえぬといふてハ田男さゝ言まて
下の六人といふ是にえたる所えぬところ有と
ハ上六人ねの代につけてハ勅撰せずといへとも

猿沢の池もありをいひて即下にそを勘へり考ふるにたのたゝひになむ有て上下にゝの御時よりこのかた年八もゝとせあまり世八とつきになむなりにけれはかく八年をも世をももしる人多くしのひてよそありこれも古学序のひとことをもてあはの人みくたせるゝ何ぞといへる年八百年あまり世八とつきといふ八平城一る大同の始より延喜の今まで御世八十代年八百年になれるをいふ八始めてこち大同の年より人万呂赤人ありて在て万葉を撰めりとおもへるなるへし　大同のころまで人万呂八存て延喜世八七代、年八百年條りになり赤人も聖武御世八六代七十年たゞりにあめ下又万葉集八先八二のあるをいふこれ八諸兄公の撰のとくいふることは寛平よ元年よりおのつから今又家持卿の家集にのみ此家集とも加りて二十巻とまとめるなりていふ

或説に佐兄らの歌よく此三年かおとあれハ此万の撰にハあらぬとふハ万葉を二十巻をよくによう撰とふれてよこ

よして天平宝字三年正月までの哥あり

て大同元年まで四十四年おほくへたゝれ

あることも万葉みちもちをいふ哥をえらびし人かく

なることを流布せさるまゝにて不用一言を主

返しよむ事やはあまたきこえしもあやしくおほやけ

の筆なし緑は才くずれ

今此ことをよみ流かさくわたりき人をはめや

けしき由し歌までハいまだけ

なるにいふとこれら返えてるところえぬ本

千集をよく見ハ撰と家々の集をまイミコト明らかなる下

をのせむとするに官位いと高き人の歌を

ことさらにむねはしらわかち選ハいにしへ今の

京よりこなたにも極めて歌よき人に猶選

しかるを古今集よりは万葉もあれとも此事はいふへき

ものゝ中上代集にハ天皇皇后皇太子の

大御歌をはしめまつりての人とよし〳〵撰者を選

てのせさる事とも是をもて明らけし

そのかみにちかき世にその名聞えたる人ハすなは

ち僧正遍照ハ歌のさまハえたれともまこと

まことかしとハいとけ僧正の心は世をていり一休和尚のたハ逆ある云馬羽僧正のをこ絵かけるごとく僧くを見ぬ道落てようし物

すくなしたとへハ絵にかける女を見ていたつらに心をうこかすかことし

其歌にとハ古の官位高き人ちかくみかとにつかへいつくしみさかゆるハえて見しをとハ出家の後ちさゝやくとして滞なきをいふ一説にくるしとハ此僧正の歌ハ口に詠くことさおきなりし一心ふかけれハ志何まれなるさみなる此様ハいつくしきもの心もたつらすを少えたり

こ文おさ解そりまこそかしといやしけてんされと古くのおさまことくよ心はさくいひつてうて小ふたら文マよ意とお

於に此僧正をは見たくこそあしかれ此川かりしくやさし僧正此つらめらの心をそしるよしなし助けもつ様そまへましハあらし

在原の業平はその心あまりてことはたらず（けなりさりとへハ言葉を云）しほめる花の色なくてにほひ残れるかことし

色緒まさるハゆたりとする所ことはたらぬとは言を遠くもとめいひてたりしふさくるを

ゆゝしくいとふにたらす　すへては詞をめてふ事
なれハ也
考るに此詞花の実ハ心の始りくるたにおゐ
いらさる事有とき中の要を採て引
におのつから深りなるこゝろ動き出ふらし
結述ハ言たらしむといはむハひさふるに過て
判了あることにてたらしむ傳述あまてりし文の
體も心に至て短くひとらまくする故に
くたらぬ事多なりけり文此詞法の

詞ハいふにめてたし　心もふかくい有らハ
こそ述も得つるかことき書にもほめる花とせ
実ことゝいふに書ハ種有ともさほめる花ハまて
なくそえてら申迄
ふむやのやすひてハにことゝだたく出てその
さる歌におゐていはゝあきんの結きあめきてく
らんこそし
こゝろ〳〵るとハ字津去處比谷さるゝ
なとそいふまてまことに志りしそめある歌に

凡矢小
古の風を
よめハす
うかゞし
すうさる
かゝらう
んとされ
ハ実ホい
うぶに差
之ハ而也
り祈れと
すけれ
と付ラツ
を兼ん
えハ無き
のさとま
も先今ゥ

あきびとハりの言み紛て〳〵巧をなるにつけ
てハすりぐるしといへたとへも此言のこゝ
のすりハ雄々しきとあしとするにや
老るに業平の庭の谷てふあみ此言み強く
悩しく悲し　是ハ古人の丈夫のふるをとらす
れさるものゝ此姿をうつしとせハ人のよの
犬さとハ神わしまでハ雲の雪みの上にい
ろりすなむ。あまさ日ハ照らさまくとめは
むの夜かゝる月のかゝく惜もなと同し

ゐし似て
うくいよ
人のおも
女めきて
丈夫のす
りとふあ
に

さもの巧ミ有てりよく強きを得ぬ事と
きんゝ撰に今の世の中人の心花と成しをる
うきつゝの判み実に聞書ハ此ゝに
宇治山の僧たち世むハことぬすゝふかてれし
めおちりたしかなふ久いゝ秋の月を見るに
あ川きの雲ミあへるかめし
ことばかすかなるとハ始る一かとするをも
ふよミ此字序に具文遁去てふに同し
く逃にお〳〵らき心ちすると云へうし紀あた

又たりなるにとハことの心をきゝわけるもいい
さてあらくあるといひて得あらぬをそめた
とハ閑幽なるてふ身秋の寝覚をあつるハおほけ
なる寝覚ともいひていかに月にかけしといへど
秋之夜なれハ幽りなるにてもとがむや
老るに暁の寝覚にあつべきにハ猶のたしかなら
さるをたとへり句意ハ秋の月をさし措辞ハ閑居
かなるてふことにあはせるをさてハ文字序に
閑花繁簾といふ身こそかなハ幽巡なるといふにか

なかりし意悟りし　さて此次にある歌多
く聞え侍れハ彼此を通ハしてよく／＼考ふ
云あり又も除く事　何ぞといふに此六人の
ことなりハおの／＼うたの数を載せてましに
此うたにてハ文の解説る且用なくはぶかなく
て必要之筆なる様ならずもし此法師
のうたハきやくより一首のミ傳はるか又数もあ
まりに深く侍らぬやうもあり是此六人の中
までハ古く僧正ハ弘仁なとの比みへ又て

或説ニ八
強キシナ
とすれハつ
よからぬハ
得ぬ所也
といへと小町
のおもむき
あふれ且
毋又之の事
より終き
をぬ双さ
れハて八
強ニあう
らをつよ
からぬと
云ふハあ

おハ妙なる道とて儀道のみなる節に比中に

八分也　一にや

小野小町ハあえ手道なるやう書てつよからぬハ

よろきをとらるみるやうなる所に似たり

あえ手なる中にかてとハ殊なる一所にてふにあり道

り殊道ハ打と急つきさめのあハ道ニ書に聞

申さるゝ女のくせをやハらかにつけて殊なる所

とすりからく筆をつかふにとハなよくして

力なきさを得ぬ所とにぞなりぬ古人の家

らてさまよ
序小教序
字方を手
るとひと
しかるふ
きをよ
こされと
強ふれ
ミて八字あ
或説ニ又
ことく聞
へて意を
言とおり
なるこ道
もろ文
さかの
て能く云
とろんと
すれハ乙

八志ノ事

告る小町ハ古へ歌にかしこき衣通姫の流

なりといひまふにつよからぬハ女なれバなる道ハなるべし

といつるこそ二つとも能ふ加へしぬべき跋にいふと

くこ道ぐの言葉くハこその文記手道且ておく

より流を字にて書し八字序を引て加へ

しこと知るへし　文衣通姫の事日本記に三

そあま道ともちしてすく道てるよしも見　且

小野小町の家いかなる一所の似たりとて流ことい

かふや筆あらぬ事をいつるのと強からぬハ女の家

のゆく言みめくらさりし多紀し古今序其人ハ官相の真八て流言を挙て出しこと多けれとこゝの流通暁と猿丸大夫ノ流言を

ハカとしこれも後に加へし物ぞ何をといて對句の新て八ゝ文ハにとふいめハなり

あはれハなよ〳〵しても理りなし只に強からぬといはゞあてよき事あるもとちのかく悩める所有ことゝきゝと女の哥なれバと云物ハ強からぬはする出来なれハなるやうなる所ありて不強ともいはれぬやこ哥ハ強からて云ぬ心をも得ぬと云人の心もて加へし筆なれハ文級に随る所なれぬ所有と筆て其のしに皆いへるとも言有て八小野小のと強ぬ所なきかことしさて八新小いふる文に喜遠子こゝハ小町をさへ比つて小出へつしは出そしりこハ強ぬ所も有ことよし

大友の黒ぬし（ハそのさまに言　卑しき）そのさまいやしいはゞ薪おへる山人の花のかげにやすめるがごとしそのさまにて上手に得たる所といふ言有故と今ハ薪おへるハ真字序に頗有逸興而體甚鄙といへりこの有逸興といふにあたりハおもしろくしてをかしきさま言有故と見老たる山人の歌比さまを見ハいひしと云ハゝ小そやかなしおとゝいひもと云そかの過照ハ歌比すかると時と云ふみむかるゝ小詞比書て小さまやうあはれなるはいかにしとたより山や不葉に

てれたる人ハ万民のえだし冬大きなるも思ふ人の
厚くこまやかなるも赤く人の清くうつくしも
情良の古くからうきもさる人ゝに悪なるぞ
とくおのく四の時ハ趣有りぬし母よしの如く
かくて春ハうるハしなるをとりて秋の時をも
ば春なるを数へもみ似たり夏ハ男の悲（カナシミ）秋
のきのかなしくなきハ風のえけしきもおのく
よし有てそのうちの行ふなるはその身人
のよろしきに時ハさるやうかくよろしくしてハからく
ふるの温厚和平なるを心としていみじくも四の
時ハみだりて天の下にけがらハしき強きことなるぞ
かの国に志ら治りし代なりし皇朝の道ハかく
四の時によく平和なのとし　さる迄ハことに天業
え御代治りぬるものとなりにもいかめしくもあるハ
まことにもかくしも人々ハ生涯のまゝるまゝにいみ
ておのくよろしき事とに挙ぐる人々のこ
とし　うその判ハ人の如こなりこむけて大や
けなくはうてあまた
こゝのみくにの名高き角ありあふにおふるうつ
くのえひもろうもてあしく小ちつけさ木の葉ハ

ことにおほく道とかをのゝおもひてこゝの
心えぬなるへし
おなしむ人世にひろく多きはさらにいそろ
うれはるつゝと志けきものゝ義になすくて
さ世とも常とはうえてこそし、あしを判
るつきをとなるはあしといふすへての事ま
このかはにてかくしあしを定めいかにし
よき人のうしとよくいてゝふ大にかまひと
しいふ世ともをさらさ人の定見はある
つきさゝ

老ぬるに世には行末管鏡りの顔にさしそ
かねもうくよむし人なりの言人にはなはだも
なしぶとてし過て閑也
かゝるに今すてゝきみてのこゝろさしめくく
筆雲の時とのゝてにおなすなりぬあなつき
おぬさう川くらしあるこや海の中まてふ
うまひろきれなる色々のけはくえ山の
ふもとよりも志けくおもしまして家つの
まいりこらをきこうしめてといとぬさら深く
のことをすてなはぬ力ありみ古への事とも

られましふりにしことをもおこしたまふとて今もみそなはし後の世にも傳はれとて延喜五年四月十八日大内記紀友則御書所のあづかり紀貫之さきのかひのさう官おほしかふちのみつね右衛門の府生みぶの忠岑らにおほせられて萬葉集に入らぬ古きうたみづからのをも奉らしめたまひてなむ

かゝるにいにしへの漸におよぶまてりといへともいぬ所有が如くなりみそかの中にもけ

紀氏を河内の卜訓註是ハうつハ左傳に恩

よろしきを撰ばしめて萬葉に續て古今集を再び起しなんとてといふ事四の時九かへりとは四の時は一年をいひてその九かへりは九年之事序にも陛下の御宇に今九年とかゝれりけるハ寛平九年に日嗣しろしめして今延喜五年は九年に當れりあまねき御いつくしみとハすべてとふさぬ詞ゆゑならの波とハ民を廣く憐こまかにいつくしみいつこまでも及ぶを波にたとへて即八嶋の外まで流るといへり

はとく
ぬりおきひ
こ歳へ
うこきなる
これ出ハ
之

し海のわとハ神代より日本の事を大八
洲豊秋津国といひけれどハ古へ新羅
高麗百済などハ本のくにゝておほくの他の
国にも我すてし御うつくしからぬ
しといふほとくたら山ハ木しげきをもて世に
清らかのさけきふゑをふミつの政事を
いにしへの下開しめにハ大御事しげけ
くおもしまかせ此間にふみつの事をもて
すゝ遠路ハじ又万葉集の頃に此事ゝ
えゝるゝ二度おこしかふるゝへ付給ふて

万葉ハ
雑歌ら
此文の
叙ぶり
して次
ていと古
きうたゝ
のおほく
それゆゑ
世おやハ
より万
葉まで
志らとも
も此集ハ
似つかハし
からずて
ハて奈

の下に古への道をあらハさむとたまふて
こゝを思ひて下にいはひ是ハ文の道今
もこゝハ此度撰たまふ集をこゝろみ今
もゝるかして御心をえたしりにて其後の世
にも伝れとおほしてたふに大内記ハ内に在
こゝ大小のこゝとのりみ此あまたをもろき御所
の記録をたてつゝ此ゝる御書所の舘ハ内に秘
おかれ御本所ありてそこに出とも館しつかさに
（上ハ別当　下ハ書頭）さいみさぶらふ官人ハ別当ハ納言中将
の国此少目なりし大隅の府生ハさらに官の下

うちの中にありまするおの万葉集を遺或ハなり乃葉より似の奈良の都みおを多る

に四人ありて此人ともみな時に交れりの五位にてこれらハいと卑き官遠く时にこのよしよこし遣ハおそはしらるへし之万葉にハ偽め古きうの歌もハ奈良の朝の歌のみ乃万葉にハ也見ゆるなる大ーめとして今の京の弘仁の比なるまでも古きに次さて天長承和の比より今の御代までの歌を此集に撰ひ出さるとそ是貫之手まゝるゝつのうみをもとハ些撰んで右四人の哥なり

考るに今此集に萬葉集に入るゝ哥七首又ハ葉の哥を撰して題ハ異なれど実ハ万葉の哥なるを入しも多し其の文からハこハかふらむまじき事なるにつけて也よくさも久しく後世の万葉集とよはし二十巻を中に撰し集むるハ初一二の巻を始今の十一十二二十四の巻なとや添つらむ他ハ古歌集或ハ人々の家の集なとよりし物へ撰ひて万葉集と云ハ一二の巻まての古み巻ともいひて他ハ乱く此歌集とて別になし中より取りて此を

て家に集に入しかにハあしさるにや此
事ハ猿定かおし給ふ様の老人料にいて
世ら迄の中にもうめのさかさかりけし絶て
かきたに定家卿紅葉を行雪を見る事には
しるまて文鶴の編には芽て実にもおもえ人
をもひくらし秋なき夏の夜もさらてゝつくさこえま
ふさの山みちくりくるめむけなたいのりあるハ嵜
兵範秋冬にもいしめくきくのかをとる是
えゝたか雅のえけるすて千おはしまゝなは
弟子古今和歌集ともりく亭夜あ何えんえ
らも迄く山下水此まえ候須のさ砂のりす
わ母くつもりぬ迄そ今ハあ人の川の瀬にか
るうしこもきこえ候はされ石のいあらそとなる
よろこひのららてあるへき迄に隔から葉に
ハ去の花此にたひすくおくしてもあしき
名のゝ秋此夜の長さをとりこてき六川ハ人の
耳にわろりつハ秀の兄にちちあくとたる
おく宗のよちおるく志りのおさふしハつら
白きらり此世におかしくうまれて此事の
時にあるとなむよろこひぬる

それゝ中にも或ハ此集の部み次てをいふ
梅をかざれハ春時鳥ハ夏紅葉ハ秋雪ハ
冬霧雁ハかつ秋なき夏冬ハ恋あふさ
か山にハ別く旅をふぬ春夏秋冬にもいら
ぬ名さしハ雑也此中に雑体と大方所の
猶歌おもむきをいふ也さて二十巻の部の
次ておもりめさて千うたとハ此集に千首
あまりの歌あれとかくいふハ文之をきまきハ
春より大やう和の御歌まて廿巻ゝある名
つけて古今和歌集といふ古今ハ上
にもいふごとく万葉集にいふハ奈良の朝
の歌より今のみやこの大同弘仁の頃まて
の歌を古とし仁寿斉衡なとの頃より昌
泰延喜の今まてを今といへるよし此度
こゝ迄よりハてらひえられて歌の数多
くのりし迄ハ末もくつゝきりぬすいさゝに
ちをいつ山下れハあへぬまゝ浜のまさ
ごハ数多くさゝへきされ石のこゝハかくて
いふ歌の集の事を集ゝ達しハ此行末
の代々にも此事をあるしかしそ栄え

申すともいふ類へしまへらするハえらく終る四
人のよしをいひてさておほせことゝさとりう
ふりまるよしをこむふりきまへらハ志い
字序に符号を率しに同しく符とハ名
りていふ言之まへもかとなく悪かるべき心にて
以かくおのれをたりていふことわりなる
とほにまへみるさしに語てまくらと牛
るハ甚いらわ中て且まへつ此の下とふさてっ
切っとくして詞ハ其の花なとゝ嘱ふ下
まへらを詞と読（りうち言ハ）あしき字序の
りら文の句読の例もさらくにありけす
くかくとハことえふうるしさ字すく
あしとさ学ありきなのこさハむあしさ名
のくあきくさを読くしあるをと間に秋のお
といひて長きたとをせりっこて其ハ雅著
まへそことは大にて付えくらをさうけのるにあ
きこつけるくかに長かるなをはまもに矢ハ
ひまくし字れハむあしきなあまとくて
て以りおまハ人の聞耳に恐まかあのおも
はむ心わもはちしりれといひかくかハせる

るもみなしぬといへるもいふハ今の世もなほことを
しやうきてよさらに道といふことなれハ是
なしふるき彼をもする時ハ猶におもりハお
そろへといふをはじめるまて古へのことを
えられ引雲井ハうちなやみたるも為鳴康ハ
おきふしといひ學をもみこさすて古のことを
おもひたるばかりとハいへど愚く世の人やとも
にうまれながら且さてこの事にあ河
ゝ達するところにひぬるといふ
人万呂なくありみられとおもひことをでま達

いと上つ
代ハことゝ
らでまそ
古事記
の文なと
又飛鳥
藤原奈
良なと
まて詳し
続紀式ハ
古き大御
代の道を
なとふて
学ぶい
と及さり

るゝ答
人万呂ハ既にふるくなりし後ともその事ハう
しなはれし世にてありてかく此集をも
えらびもとられしといひてその中のうたを
さるといへど後とも万葉集ハ奈良のみ
こゝとよミてあつめたるともみる後ハそれ後より
さきに成りて後もさきとし万葉ハ人万
呂赤人のあとしえらひしものと世貫之も
もうるしや然るに後ハ甚しき誤りに彼ておほ
もふ万葉の事にハあらてその後へする

てめて
うさこ
て多け
進ゝ言
の意像
きゝこと
をとぬむ
ハまさあ
りあらハ
ぬかもめ
こゝろ

といふみやあらむ
考るにこのことは論語に文王既に没
して文こゝにあらずやといへるを
して半くろハからや説にもいふとを
皇朝の文ハうゝ文によりてあまりふ
且論語の文ハ孔子のことつうらの事をいへ
そもそれによりてハても毋意くらく如
らの事をいふことなるにて大に下りて
いるに書きしるしけ文心由りハ
さらひ時うつ事かうたのしこゝろありしこと也

きゝふともゐゝのうしあるをやあがめき
の余にハ万葉のちりうせずしてまさ
きのかつら長くつたハりそのあと久しく
ちゝまれらハおのゝ道ともすゝとの心をもえ
うらむ人ハ大かたの身をこゝろことをにいみ
らをあつめてかたとひさころめかも
是よりハ此集の末久しくつたハる文ならい
ことをいふさて今に世のおほうはりなりも
此集の本きしてかゝらかさえハうさえに
つたハりて久しくともまことハまの世に方

のすゝし心をさゝへて老人のたすけとなる羽く
又こゝろみ以前へも此集えらばれし
ほのかうきもあるひハふところあるひハうひ
祢りハさらぬめハやくいふべし御の家流の筆あさ
手のそろへるとハ栄ある物として対様にお
之かり皇の跡ハらうにて色のふめるあと
らて文字を作りしとかより文字の事
をといへかもハ無さらめかハ無へしとかゝる
様にても毛ハ助様也

考るに文字といふハ字音をいとなみてりうしに
筆しハいりにさゝかくてもいひさゐ有ぬへし
凡此文有ふる筆をハ深くぬと用ひて書き
又すへての意にハいれてことこゝろへなりらふ
ことハ学元ハ情有なりぬつきことゝもこと
ゆめてつき研しもあ進と共て丈夫の文あ
るさぬにあらハ女の風之文ハ飾りに飾
又さて筆の意ゆらりわかさるもさハこゝろの
書様のてよりのうち多くハ上にも似

るさまの中多し差もて言はすてらんとを
しよりのこと

右古今和歌集序考或人乃著述せ
し成得て之を手写し畢ぬまく予加
わうしの文なとかはしの書加へ侍りぬ
時よ文化元年甲子冬十月
越後水原小田嶋允武

64紙